

臨時休業下の2校の取り組み

福岡県立須恵高校

オンライン授業のメリットを 対面授業にも生かしながら、 不断の授業改善を目指す

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、全国的に臨時休業が続いていた4月20日、オンラインによる学習支援を始めた福岡県立須恵高校。多くの教科・科目でオンライン授業を実施したその背景には、「思考力の育成を目指した授業改善」というねらいがあった。

授業改善の延長線として オンライン授業を急速に推進

福岡県立須恵高校は、臨時休業が続く4月20日、3年生の2クラスで数学、保健体育のオンライン授業を、1年生の一部の生徒でオンラインホームルームを実施。21日からは、学年統一時間割で午前と午後各1科目、翌週には午前2科目と午後1科目の授業を、さらに、5月の連休明

けからは、朝のホームルームおよび午前と午後の各2科目の授業をオンラインで実施し、オンライン指導の体制を急ピッチで構築していった。

同校では、臨時休業前から全教師にタブレット端末が配布されていたが、授業でのその活用はこれからという状態だった。そうした中で、4月から同校に赴任した荒木礼子校長は、新年度早々に県下の公立高校の臨時休業が決まった段階で、各家

庭への学習課題の送付などと並行して、Zoom（*1）などのオンラインツールのアカウントの取得を、県教育委員会と連携して進めた。

「オンライン指導は、ICTが得意な教師だけがすればよいものではなく、全教師が取り組むべきであると考えました。オンライン指導を単に臨時休業期間中の対症療法として位置づけるのではなく、学校再開後の授業や課題のあり方そのものを考

え直すきっかけにしてほしいと思いました。先生方には、『オンラインツールを活用してみれば、必ず指導の本質が見えてくるはずです』と、自身の指導を改善する貴重なチャンスになると呼びかけながら、一方で『携帯電話が使える人なら、Zoomも使えます』と、気軽に使ってみることを勧めました」（荒木校長）

荒木校長は、オンライン指導に同校よりも先駆けて取り組んでいた福岡県・福岡市立福岡西陵高校（和田美千代校長）が実施するオンライン指導に関する校内研修に、複数の教師と参加。その後、自校で、授業動画の配信を含むオンライン指導の実施に向けた校内研修を実施した。福岡西陵高校の校内研修に同行し、須恵高校での校内研修で主導的な役割を果たしたのが、今年度から同校に赴任した深江一美先生だ。深江先生は19年度、福岡県教育委員会から北海道の私立札幌新陽高校に1年間長期派遣され（*2）、4月から須恵高校に赴任したばかりだった。

「札幌新陽高校の校長には、『ただ学んで福岡県に帰ればよいのではなく、福岡県のために具体的に何ができるのかを考えることが大切です

*1 PC・スマートフォン・タブレットで通話に参加できるビデオ通話アプリ/サービス。

*2 本誌2020年2月号「特集」(P.22～23)参照。



深江一美
新たな学び・ICTチーフ
ふかえ・かずみ
教職歴16年。同校に赴任して1年目。国語科。



武田康助
たけだ・こうすけ
3学年主任
教職歴18年。同校に赴任して5年目。地理歴史・公民科。



俵孝太郎
たわら・こうたろう
研究部長
教職歴22年。同校に赴任して5年目。地理歴史・公民科。



溝田陽一郎
みぞた・よういちろう
教頭
教職歴30年。同校に赴任して2年目。



荒木礼子
あらかし・れいこ
校長
教職歴31年。同校に赴任して1年目。

「よ」と、よく言われていました。札幌新陽高校で先進的なICT活用を間近に見ることができましたので、その経験も生かし、北海道で得た知識や人脈を、Zoomなどを活用して福岡県の学校教育に還元したいと考えていました」（深江先生）

深江先生が企画した、須恵高校の教師対象のZoom活用研修では、授業での使い方を理解する前に、まずは生徒になったつもりでオンライン

ン授業を楽しむことを重視した。すると、複数の教師から、「オンライン授業に挑戦してみたい」といった声が上がったため、深江先生はオンライン会議ツールの使用マニュアル（図1）を作成し、校内に配布した。

**臨時休業中の知識の定着度を
単元ごとの小テストで確認**

オンライン指導が始まった4月20日の段階では、ほとんどの教師が、オンライン授業を実施するのは初めてだった。しかし、5月中旬にはほとんどの教師が、オンラインによる授業動画や課題の配信、双方向型の

福岡県立須恵高校

- ◎校訓に「進取、敬愛、鍛練」を掲げ、生徒の行動指針として「五省」を定める。1年次より特進クラス、2年次より医療看護クラスを設置し、一人ひとりの希望進路実現を支援する。「職業探索活動」「アカデミー体験活動」など、多様な進路学習の機会を1年次から設ける。
- ◎設立 1983（昭和58）年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約320人
- ◎2020年度入試合格実績（現浪計）
国立大は、佐賀大、北九州市立大、九州歯科大に4人が合格。私立大は、九州産業大、西南学院大、中村学園大、福岡大などに延べ299人が合格。
- ◎URL <http://sue.kuad.jp>

授業（P.18 図2・P.19 図3）を行うようになり、履修進度の極端な遅れは、どの教科・科目も出なかつた。3学年主任の武田康助先生も、「各教師が自分に合ったオンラインツールを使って、無理なくオンライン指導を実施している」と話す。

「生徒は1日最多で4コマのオンライン授業を受けますが、視聴の負担を考慮して、オンラインでの説明などは15分程度とし、そのほかの時間は、オフラインの状態プリントなどに取り組みさせています。授業アンケートを見ると、大学入試を控えている3年生も、概ね好意的に受け

止めており、入試への不安の払拭につながっているようです」

だが、学習内容が生徒に定着しているかどうかを検証するのはこれからだ。武田先生も、「長期間、通常の授業から離れている3年生の学力を客観的に把握するには、1学期中の模範試験がますます重要な役割を果たす」と語る。

「ただし、入試を控える3年生においても、判定だけを見るのではなく、日々の授業で把握した生徒一人ひとりの実態と重ね合わせながら模範試験の結果を分析し、3学年団としてのきめ細やかなサポートへとつ

図1 オンライン会議ツールの使用マニュアル



生徒が投稿したノートの画像の共有方法や、画像への生徒の書き込みの管理など、実際の授業を想定した内容にした。

* 学校提供資料をそのまま掲載。

図2 オンライン授業の展開例（俵先生・3年生の地理Bの例）

【教科・科目】地理歴史・地理B 【分野・単元】自然と産業・資源・エネルギー 【設定時数】全6時間中の1時間目 【単元目標】資源・エネルギーに関わる分布の特徴を理解する。また、資源・エネルギーに関わる多様な問題点について多角的に考察し、解決策をまとめる

| 本授業での学習内容 | 本授業で身につけさせたい資質・能力 | オンライン授業の流れ | | 授業内容 | オンライン授業の工夫点 ①授業前、または授業中に施した工夫点 ②授業をしてみて、予想よりもうまくいった点 ③授業をしてみて、予想よりもうまくいかなかった点・改善点 |
|------------|---|------------|------|--|--|
| | | タイムライン | | | |
| | | from | to | | |
| 世界のエネルギー資源 | | 9:00 | 9:03 | 【オンラインツールの利用】<導入> ・出席確認(1分) ・前回の授業のアンケート回答の「問い」への返答(1分) ・本時のめあて説明(1分) | ①スライド資料提示の仕方。 ②おむねよい。 ③伝えられる情報は限られる。 |
| | 【知識、技能】 【思考力、判断力、表現力】 資源・エネルギー問題の現状や問題解決に向けた取り組みなどについて多角的に考察し、理解する。 | 9:03 | 9:08 | 【オンラインツールの利用】<展開> ・1次エネルギーの生産・消費(5分) | ①自学ノートの作成。 ②予習・授業・復習のサイクルを身につけた生徒が増えた。 ③自身の「問い」と解決策まではなかなか難しい。 |
| | 【知識、技能】 【思考力、判断力、表現力】 資源・エネルギーの場所の特徴や場所の結びつきなどに着目し、多角的に考察し、表現する。 | 9:08 | 9:13 | 【オンラインツールの利用】 ・石炭の特徴(5分) | ①複数のオンラインツールを使い、質問しやすい環境づくり。 ②おむねよい。 ③授業後の質問は、1つのオンラインツールに絞った方がよかった。 |
| | 【学びに向かう力、人間性等】 自ら課題を設定し、関連する地球的課題の要因や動向などを多角的に考察し、表現する。 | 9:13 | 9:48 | 【各自で自習】(35分) ※生徒の質問があればオンラインツールで回答 | ①配信時間を10～15分で設定。 ②おむねよい。 ③予習を行わないと難しいようだった。 |
| | | 9:48 | 9:50 | 【オンラインツールの利用】<まとめ> ・まとめを行う(1分) ・振り返りと授業アンケート記入の指示(1分) | ①ICT機器を2台使い、随時チャットなどで質問などが見られるようにする。 ②1人で行うので、生徒の反応が見やすくなり、授業が進めやすくなった。 ③一斉授業が始まると、学校の機器が足りなくなるかもしれない。 |

よりよい授業を模索し続ける
教師たちの声

◎動画配信授業のメリットは、生徒が繰り返し見られることです。一方、デメリットは、配布したプリントなどに対する生徒の質問は、別のツールを使わないと受けつけられないことです。チャット機能を使って質問を受けつけたこともありましたが、授業に参加する生徒の数が少人数でないに対応が難しく感じました。並行して、オンライン会議ツールを使って、K P法（紙芝居プレゼンテーション法*1）を用いた授業はポイントがよく分かると、生徒に好評でした。オフライン、オンライン問わず、今後の授業でも取り入れていきたいです。（武田先生/地理歴史・公民科）

◎オンライン会議ツールを使った授業では、生徒の通信量の負担を減らすために、ポイントを絞った説明を心がけました。生徒からも、要点がつかみやすくなったと好評でした。オンライン授業は自分の授業を進化させるきっかけになりましたが、対面授業に比べると、生徒の反応がつかみづらいため、自己満足に陥らないようにしなければいけないと思っています。今後は、ウェブ上にドリル教材をアップし、生徒が自分の理解度に応じて学び直しができるようにしていきたいです。授業動画の蓄積によって、反転授業も進むでしょう。生徒一人ひとりに対応できる授業へと変わっていく予感があります。（俵先生/地理歴史・公民科）

◎オンライン会議ツールを使ってチーム・ティーチングに挑戦しています。1人の教師が授業を行い、もう1人は生徒の反応やチャットを見たり、生徒の様子を授業者に伝えたりしています。授業後、「あの生徒はこういう反応だった」と、生徒の理解度や授業構成について話し合う機会も増えました。また、生徒と同じ目線でほかの先生の授業を見ることで、生徒がどのように理解を深めていくのか、これまでとは違った視点で確認できました。ツールの使い次第で、授業改善の可能性はまだ広がっていきそうです。（深江先生/国語科）

上記の地理のほか、国語、世界史の授業の展開例がダウンロードできます



*地理、国語、世界史の授業展開例は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト(https://berd.benesse.jp)からダウンロードできます。「HOME」→教育情報→高校向け」をご覧ください。

*1 公益社団法人日本環境教育フォーラムの川嶋直氏が開発した思考整理とプレゼンテーションの手法。

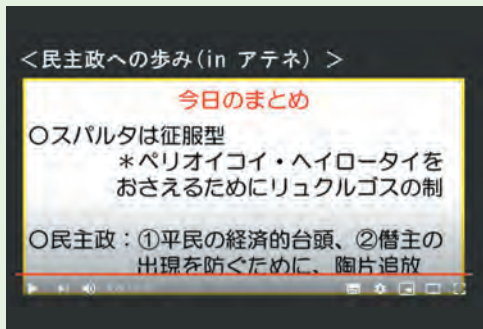
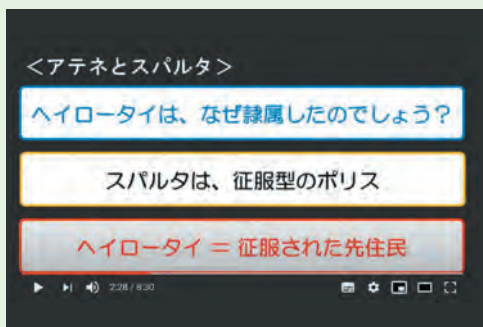
*学校提供資料を基に編集部で作成。

「なげていくことが求められます」
臨時休業期間中の履修内容における、生徒の知識・技能の習得の状況は、各教科・科目で実施する単元テストや小テストで把握していくと、溝田陽一郎教頭は説明する。同校は、今年度より定期考査を廃止し、それぞれの教科・科目において、思考力・判断力・表現力を測る「思考力・活用テスト」、知識・技能の定着度を測る単元テストおよび小テストを実施し、生徒の資質・能力をバランスよく育成していく。

「臨時休業中の生徒間の知識・技能の定着度の差を、スモール・ステップで丁寧に確認し、それぞれの生徒の状況をつぶさに見取することで、学習の遅れを迅速に取り戻していく考えです」(溝田教頭)

同校における定期考査廃止を始めとする改革は、約5年前から同校で進められてきた授業改善の一環である。日々の学びの成果と課題を見取るためのポートフォリオの導入を始め、様々な手法で同校の授業改善が進められてきた。そして、「テストが変わることで、授業改善が最終段階に入る」という思いが、校内で高

図3 オンライン授業の授業動画



武田先生の世界史Bの授業動画の一部。対面授業で使用していたパワーポイントに音声による説明を挿入。要点を絞った、コンパクトな構成となっている。

*学校提供資料をそのまま掲載。

「資質・能力の3つの柱をバランスよく育成したいと考えていても、授業ではどうしても知識・技能の育成に偏ってしまいます。そうした授業を、思考力・判断力・表現力を育成する授業にしていくには、定期考査を変えるしかないと考えようになりました」(俵先生)

ここ数年、主体的な学習活動や他者との対話の場面が増えるなど、同校の授業改善は順調に進んできた。だが、学校再開後は、「3密」回避の観点などから、授業のあり方も変わらざるを得なくなるだろう。

「だからと言って、教師の一方的

な説明ばかりの授業に戻ってよいとは、もちろん考えていません。想定外の出来事乗り越え、新しい社会を築いていくためにも、思考力・判断力・表現力を生徒に育むことが必要です。授業中の対話の時間はしばらく減るかもしれませんが、そうしただ中でも、主体的・対話的で深い学びをどのようにして実現していくのか、先生方と話し合っていきたいと思っています」(溝田教頭)

教師が本音を吐露しながら改善を進められる学校に

3年生の進路実現を支援する上で

3年生の進路指導における

オンライン活用

同校では、例年5月上旬に3年生とその保護者を対象に実施している進路説明会を、今年度は6月2日にオンライン上で開催。日本学生支援機構の奨学金の予約採用などに関する動画を製作・配信した。また、6月からは、3年生に大学入試の出願に関する説明動画を各クラスの教室で視聴させた上で、クラス担任による対面の面談を実施していく。

「3学年団では、5月中旬からオンラインと電話での個人面談を実施しています。現時点での志望など、基本的な情報のやり取りはできていますが、生徒と教師が成績票などの資料を見ながら具体的な話をするのは、オンラインや電話では難しいというのが現状です。また、それ以上に難しいのが、面談中のちょっとした言動から、生徒の内面を察知することです。6月からのクラス担任による面談では、臨時休業によって生じていた、生徒と教師のコミュニケーション・ギャップを、丁寧に埋めていくことが求められそうです」(武田先生)

は、臨時休業中の指導経験を対面授業に生かすことが特に重要だと、同校の教師たちは考える。授業の振り返り内容や質問をオンラインで集めるなど、オンラインのよさを対面授業に生かして、引き続き授業改善を進めていく考えだ。

学校全体で授業改善の取り組みを積み重ねてきた同校だからこそ、オンライン指導を「授業や課題のあり方そのものを考え直すきっかけ」と捉えた新校長の思いを、教師たちは違和感なく受け入れられたのだろう。荒木校長も、オンライン指導を導入したことで、教師同士の話し合いの場面が一層増えたことを感じて

おり、「先生方が愚痴や弱音をこぼしながらも、前に進める環境をつくる責任を強く感じる」と語る。

「オンライン指導は手探りの部分が多すぎて、各教科・科目の特性、そして先生ごとに合うツール、合わないツールが異なります。今年度の3年生の進路実現を支援するためにも、私たち教師が様々なことにチャレンジして、失敗したことや困っていることを率直に語り合い、お互いを支え、高め合える風通しのよい職場をつくっていききたいと思っています」(荒木校長)